１．文学部・人文科学研究院

Ⅰ　文学部・人文科学研究院の研究目的と特徴・・・・１－２

Ⅱ　「研究の水準」の分析・判定・・・・・・・・・・・１－８

分析項目Ⅰ　研究活動の状況・・・・・・・・・・・１－８

分析項目Ⅱ　研究成果の状況・・・・・・・・・・・１－26

Ⅲ　「質の向上度」の分析・・・・・・・・・・・・・・１－31

Ⅰ　文学部・人文科学研究院の研究目的と特徴

１．研究目的

本研究院の研究目的は、次のとおりである。

①人間の学としての人文科学の確立
②原典の精確で豊かな理解、理論と実証の高度な融合
③国際レベルの研究の推進
④アジア研究の深化

本研究院のこの研究目的は、本学学術憲章（平成 12 年 11 月制定)、「ミッションの再定義」（資料１）に基づき、また本研究院の「理念」（資料２)、本研究院の「人文学の特徴」（資料３)、並びに「研究における特色・強み」（資料４）と合致している。

○資料１　「ミッションの再定義」結果（抜粋）

九州大学人文科学分野　【研究】
○ 東洋史等の史学全般における人文科学分野の優れた研究実績をいかし、日朝関係を中心とする東アジア交流史研究等に取り組んでいる。統合新領域分野では、我が国初のライブラリーサイエンス分野として、産学官の連携により、新たな研究領域やキャリア形成の開拓に取り組んでいる。
○ これらの取組を通じて、人文科学分野では日朝関係を扱った共同研究において日本側の研究代表者として複数の教員が参画した。また、統合新領域分野では、地方自治体の公文書の廃棄選別に際して、文書記録管理学の観点からの関与・助言につながっている。
○ 今後、総合的な研究を組織的に推進するとともに、我が国の社会の課題解決・文化の発展に貢献することを目指す。また、アジア研究の深化を目指し、特に歴史学部門やライブラリーサイエンス分野におけるアジア・欧米大学との国際共同研究を推進し、我が国の社会・文化に関する研究成果を国際的に広く発信する。

（平成 26 年４月に文科省公表　九州大学 No. 73）

○資料２　本研究院の理念

人文科学研究院は以下の理念を有する。
①人類が過去に遺した東西の伝統的文化遺産を継承し、その中に示される普遍的価値をさらに発展させ、人間の精神生活の豊饒化及び人間性の尊厳の確立に寄与する。
②現代社会が直面する危機的な諸問題に真摯に取り組み、人文科学の観点からその解決への指針を探求し提示することに努める。

（人文科学研究院ホームページ　http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/organization/three_policy.php）

○資料３　本研究院における人文学の特徴

人文科学研究院は、哲学・歴史学・文学という、人文科学の伝統を重んじた３部門から構成され、その下に 19 の講座が配置されている。本研究院でなされる人文学の研究の特徴は以下のものである。

① philosophia（フィロソフィア、知への愛）と philologia（フィロロギア、言葉への愛）の精神に基づくフマニタスの学（人間の学、人間の研究)。哲学、歴史学、言語・文学、人間科学の諸学問分野は対象や方法は異なれ、人間という中心的問題に真っ向から取り組むという姿勢において根本はひとつである。大学には文系・理系を問わず多数の学部と学問領域が存在するが、人間への関心を中心に置くという点で、人文学は大学の諸学問の中核をなす。

② 言葉の重視。文系・理系を問わずいかなる学問分野であれ、言葉を何らかの手段として用いない学問領域はない。しかし言葉を直接の対象とし、言葉の批判的検証を主たる課題とする領域は人文学を措いて他にない。哲学思想であれ、文学作品であれ、歴史史料であれ、それは文字となった言語テクストであって、人文学はいわば言語テクストの中に人間の営みを探る学である。むろん美術史や考古学や地理学や社会学のようにフィールドを重んずる分野もあり、実験心理学のように実験を主たる手段とする分野もある。しかしそれらの分野を含めた諸学問分野が、言葉への関心を核としてひとつに結びついているのが人文学である。その意味で人文学においては日本語の精確な運用能力と外国語の豊富な知識が決定的な意味を持っている。

③ 批判精神に基づく批判の学。過去のものであれ現在のものであれ、あらゆる解釈や通念を「果たして本当にそうであるか」と疑い、それを新たに問い直し、さまざまな方法にのっとって批判

的・実証的に検証し、自らの思索を通じて新たな筋道と解釈に至るということ、そしてそれを通じて対象の新たな人間的意義を見出すということ、そこに人文学の真髄の一つがある。

④　また、３のような共通の特徴を基盤としながら、哲学、歴史学、言語・文学、人間科学のあらゆる領域にまたがって、実に多種多様な専門分野が一堂に会しているのが人文学の魅力であり、特徴でもある。各専門分野がそれぞれにしっかりした核を持ち、同時にあらゆる専門分野に開かれていて、全体として一種の普遍的人間学を形成していることこそ、他では見られない人文学の一大特色である。

（人文科学研究院ホームページ）

○資料４　本研究院における研究の特色・強み

①東アジアの歴史研究における長期の実績

本研究院は、比較社会文化研究院と共同で申請した 21 世紀 COE プログラム「東アジアと日本――交流と変容――」（平成 14-18 年度）が採択された後、中国・韓国・連合王国・アメリカの大学・研究機関とコンソーシアム協定を締結し、幅広い研究交流を展開し、また大学院生の海外留学を推進してきた。また日中・日韓歴史共同研究委員会の研究活動に当たっても、本研究院の教員が多大な貢献をしてきた。更に文部科学省特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」（いわゆる「寧波プロジェクト」平成 17-21 年度）の推進に際しては、本研究院の教員の多くが美術史・文学・歴史学などの幅広い部門に名を連ね、班研究の代表者として中近世東アジア文化交流史研究の深化を成し遂げた。第２期の評価期間においても本研究院の教員が代表となった科学研究費基盤研究などによる日本・アジア研究が数多くなされ、COE プログラム以来の研究が継続・発展されてきた。本研究院が学界で前近代日本と東アジア史研究の中核を担ってきたことは、衆目の認めるところである。

②高度な文献学研究における長期の実績

歴史学以外の、①の組織的研究に参加していない文学部門と哲学部門の講座においても、教員が所属講座の有する研究ポリシーに従い、各専門分野において世界レベルの研究を達成してきた。哲学部門と文学部門の研究は、特に原典の文献学的研究という点で共通点をもち、テクストの本文批評や解釈等において優れた実績をあげてきている。フィロロジー（文献学）が、本研究院の①の歴史的研究と並ぶ、もう一つの大きな特徴・強みとなっているといえる。

（人文科学研究院ホームページ）

２．研究成果に関する方針（OP、アウトカム・ポリシー）

人文学の国内外の拠点となる卓越した学術研究を推進し、アジア・日本研究を中心に国際的共同研究を推進するという、アウトカム・ポリシーを定めている（資料５）。

○資料５　本研究院の OP

人文科学研究院　研究成果の方針

①学術的インパクト：

ミッションの再定義において本部局の強みとされたアジア研究、国際的視点に立った日本研究を組織的に推進する。21 世紀 COE プログラム以来活発化しつつある学際的な研究を継承し発展させる。アジア研究の深化のため、特に歴史学部門やライブラリーサイエンス分野におけるアジア・欧米大学との国際共同研究を推進し、我が国の社会・文化に関する研究成果を国際的に広く発信する。また本研究院は哲学・歴史学・文学の３部門に分かれ 19 講座を有し、多様でありつつ有機的に相互に関連し合う、全体のバランスが取れている研究を可能にしてきたが、その絶妙なバランスの取れた多様性・有機的統合性・総合性を本研究院の強みとして今後も活かしつつ、人文学の国内外の拠点となる卓越した学術研究を推進し、質の高い専門書や論文の公刊に努める。伝統ある各分野の、学界における独自色と卓越性を一層強化するため、３部門並びに 19 講座がそれぞれの学問伝統に基づいた強みをもつ研究成果の方針に従い、研究を推進する。

②社会的関連性：

アジア・日本研究を中心に、アジアや欧米の大学との国際共同研究を推進し、その研究成果の公表を、英文ジャーナルや国内外の学会を通して、積極的に行うことにより、我が国の社会・文化に関する国際社会の理解を促進させる。九州の地理的長所を十分に活かした研究により、地域社会や国の文化の発展に貢献する。人文学の諸分野で先端的な研究を進めつつ、同時に多様な諸研究の成果を統合し、教科書等の出版物として刊行する。また最新の研究成果を公開講座・セミナー等に積極的に活用して、それの社会への還元を図る。

（人文科学研究院ホームページ）

組織の研究の方針を示すものとして、各部門における研究の方針（資料６）と、19 講座の研究の方針（資料７）を立て、公開している。

○資料６　本研究院の３部門の研究の方針

（１）哲学部門
人類の過去の文化遺産を歴史的かつ体系的に研究すると同時に、現代の人間と社会が直面する様々な問題に根本的かつ将来的な視点から取り組むことをめざす。
（２）歴史学部門
時代に即した新たな研究・教育を行うために、分析視角や方法論の再検討と新たな研究・調査手法の開発に努める。また地域社会との連携を積極的に進めることで、こうした成果を社会に還元し、さらなる研究・調査手法を模索する。
（３）文学部門
学問領域の個別性と普遍性のバランスに常に留意することで、高度な専門性に裏付けられた人文学の新たな総合的知見を獲得すること、別言すれば、言語（ことば）をめぐる専門研究を通じて一種の普遍的人間学の形成を目指す。

（人文科学研究院ホームページ）

○資料７　19 講座の研究の方針

講座名	研究の方針
哲学講座	哲学講座では、古代・中世・近代・現代の西洋哲学の研究をしている。近代現代においては、ドイツ哲学、フランス哲学、英米哲学が主な領域である。また研究分野としては、存在論や認識論や倫理学や美学・芸術論という哲学の基本的分野を中心にしながら、さらには、論理学や社会哲学や政治哲学などの分野にも目を配りつつ、現代にとっての哲学の意義を総合的に研究している。
倫理学講座	本講座はメタ倫理学等の倫理学における基礎付け分野の研究に基いて、倫理学における伝統的な問題から現代社会におけるアクチュアルな問題まで広く研究する。古代ギリシャ思想から現代思想まで、また西洋だけでなく日本の倫理思想、さらに倫理学だけでなく関連する他の哲学分野も研究対象とすることで、総合的な倫理学研究を行っている。倫理学の学会だけでなく哲学講座と連携して九州大学哲学会を運営し、大会運営や論文誌を発行するなど、広く哲学の学会に参加し発表している。
インド哲学史講座	本講座はインド文明圏の三千年間におけるサンスクリット文化の解明のために、古典語を中心にした原典研究を行う。 インド思想史と仏教思想史の二つの研究分野において、サンスクリット語や古典チベット語やパーリ語や漢文などの古典語を用いて、古典期のインドやチベットなどの思想・宗教・文学・歴史等の諸分野の文献を研究の中心に据え、文献学（フィロロジー）に基づく精緻な研究を行う。講座発足以来、65 年以上に及ぶ学問的伝統と蓄積された貴重な図書等の資料を踏まえて、特に写本や諸版本に基づく原典批判を特徴とする、世界水準の研究を行う。
中国哲学史講座	中国哲学史講座は、着実で実証的な研究を、その研究ポリシーとしている。初代教授楠本正継博士以来、江戸漢学の伝統を継承すると同時に、近代哲学の方法論と知識とを習得し、世界標準に合致した学術研究を行うことを心掛けている。 また、人文科学研究院の関連講座との連携を図り、国内外の学術や社会の動向にも目配りつつ、しかも、時流に流されることなく、またやみくもに数を求めるのではなく、充実した研究成果を達成し、学術的及び社会的貢献を果たすことに努めている。
芸術学講座	美学美術史／藝術学講座は、学部では哲学コース、人文学府では人文科学基礎専攻に所属している。哲学分野の「美学」と歴史学分野の「美術史」という、ふたつの学問領域を横断する研究内容となっているが、それは、美について深く思索することと、美術作品という眼前の美の様態をあきらかにすることは、本来的に分かちがたく結びついているからでもある。美の理念やその具体的な有りようを、哲学的かつ歴史的な観点から、さまざまなアプローチを通して探求していく点に本講座の特色がある。 講座担当教員の対象領域は、古今東西にわたり、その研究方法も一様ではない。価値観の多様化する今日、「美術史」はもちろん、「美術」「藝術」の概念自体も既存の枠組みだけでは捉えることのできない広がりを有している。しかし、何よりもまず目の前の作品についてよく鑑賞吟味し、関連する文献の精読と作品の分析というアカデミックな方法論を身につけることを、等しく本講座の学生たちの課題としている。大学院生は、さらに歩を進めて、個々の事象をとりまく文化的・社会的な問題についても視野を広げ、今日的な人文学全般の問題についても思索を深めることが必要とされる。

広人文学講座	Our “Outcome Policy” is to create, produce, and share interdisciplinary research on history, art history, religions, and material culture, especially, but not limited to, research in the pre-modern Japanese fields. The International Master’s Program (IMAP) in Japanese Humanities is a broad interdisciplinary program focusing on Japanese humanities and culture, with graduate students from Europe, the Americas, and the Asia-Pacific region who specialize in these subjects and their interdisciplinary relationships. We strive to interact with scholars within Japan and abroad; after only four years the program has shared research and exchanged information with colleagues specializing in history, art history, cultural studies, literature, religion, and philosophy. To this end, we share our research with invited foreign scholars at least two times a year with the goal of joint publications or individual research publications; such efforts are also experienced by the graduate students and enhance the research of a new generation of researchers.
日本史講座	本講座は「世界史的規模の斬新な構想と堅実な実証」を目標にしており、国内史的研究とともに、国際交流史研究に長い伝統と研究の蓄積を持っている。これに加えて、史料に対する厳密な実証的姿勢が研究上の大きな特色である。
東洋史講座	本講座では、緻密な史料読解・実証、現地調査の重視及び幅広い視野からのアプローチに基づいて、東アジア及び海域・内陸アジアを中心とするアジアの歴史を研究している。そのために日本国内のみならず、海外においても積極的に研究成果を発信し、海外の研究者との共同研究や学術交流を進める。中国・台湾をはじめとして、それ以外のアジア諸国や、欧米諸国などの国際会議にも積極的に参加し、中国語・英語などにより研究成果を発信するとともに、それらの外国語による研究論文の発表にもつとめる。
朝鮮史講座	①史資料の博捜と精密な分析による堅実な文献実証に立脚しつつ、これに現地体験・現地調査を融合させることでリアリティのある朝鮮史像を追究する。 ②朝鮮社会の個性、日朝関係史の特殊性に留意する一方、国際的・世界史的視点から朝鮮史を捉え、その学術的意義の普遍化をめざす。
西洋史講座	本講座は西洋史学関連の先行研究及び史料を精緻に読み、重要な問題を発見し、新たな歴史像の構築をめざす。
考古学講座	本講座は東アジアにおける日本列島の先史・古代を比較考古学的に研究するとともに、先史・古代の国際関係を主として研究している。そのため、日本では壱岐カラカミ遺跡や金比羅山古墳の発掘調査を始めとした北部九州の弥生時代や古墳時代の発掘調査を毎年継続的に実施している。また、海外でもこれまで中国山東大学東方考古研究センターや四川省文物考古研究院と共同調査や共同発掘調査を実施してきた。現在では、2012 年以来モンゴル科学アカデミー考古研究所と共同発掘調査や共同研究を毎年継続して実施している。
イスラム文明史講座	本講座では、イスラーム文明圏、とくに中東地域（アラブ・イラン・トルコ）の歴史を研究している。研究方針は、現地語の史料（主としてアラビア語・ペルシア語・トルコ語）を中心とし利用する実証的歴史研究である。対象とする時代は、イスラームが登場する 7 世紀から、現代の中東秩序が形成される直接の源流となった 20 世紀前半までである。 研究においては基本的に文献史料を用いるが、それに加えて現地での実地調査（モスクの碑文・銘文や街路調査など）の手法も積極的に取り入れている。また欧米や中東の研究者との国際交流、及び国際学会への積極的な参加を通じて、対外的な情報収集・情報発信を行うことも、本講座の主たる方針の一つである。
地理学講座	地理学講座は 1978 年の創設以来、地理学の特徴であるフィールドワークを重視した研究だけでなく、地理学史・思想史や地理学理論及び方法論に関する研究をも重視し、1978 年以来、継続的に取り組まれている科学研究費による「地理学史・思想史」研究に主体的に関ってきた。第二期中期目標期間においても、高木と遠城がそれぞれ代表者となった科研費による研究を行っており、こうした伝統は今日でも維持されている。また、こうした研究の成果は、大阪市立大学との共同編集・発行による『空間・社会・地理思想』として継続的に刊行されている。このような講座の研究ポリシーを反映して、研究室所蔵の外国雑誌や外国図書は、全国の地理学講座の中でも有数の規模を誇り、全国の研究者から複写や貸し出しの依頼が来ている。
国語学・国文学講座	国語学・国文学講座では、講座開設以来、文献に基づく実証的な研究を実践し、その伝統が現在も引き継がれている。国語学では、日本語の変容について、時間的な変容に空間的変容を加味することで、ダイナミックな研究を展開している。国文学でも、歴史的変遷を意識しながら、個々の作品の訓詁注釈に取り組むとともに、作品の生まれた時代の精神や思想にも踏み込んだ研究を行っている。

中国文学講座	中国の言語とその文学作品を、数百年から千数百年以上の長い時間軸でもう一度捉え直し、かつ東アジアというグローバルな視野をもって更に幅広く見つめ直し、その普遍的な魅力に迫る。
英語・英文学講座	本講座は英語学と英文学に分かれるが、英語学は言語事実の理解と理論考察をともに重視し、より深いレベルでの現象の説明、解明することを目指し、英文学（米文学を含む）は古典的作品を広くカバーしながらテクストの徹底的な精読をすることで、作家と作品、及び歴史・文化的コンテクストへの理解を深めることを目指している。
独文学講座	独文学講座では、ドイツ語圏（ドイツ・オーストリア・スイス）の文学についての研究活動を行っている。特に近年では、ゲーテ、ロマン派、トーマス・マン、ムージル、カフカの研究が盛んである。本講座ではドイツ語学、ドイツ文化論、ドイツ語教授法についての学生への指導もしている。文学研究は何よりも「ことば」を対象とする人間と世界の探求であるから、一言一句にいたるまで作品を味読することが、本講座の指導の基本方針である。微細なことばの実証的詮索から深遠な人間精神の営為に迫ることを目指して、論文指導を行っている。実践的なドイツ語運用能力の育成にも力を入れており、交換留学制度（ミュンヘン大学）やドイツ学術交流会を通じて、常に数名の学生がドイツに留学している。
仏文学講座	本講座の研究は、フランスの表象文化全般に対して開かれている。文学や思想の研究に限定されることなく、舞台芸術や美術批評、映画や写真、あるいは政治・社会問題といった、じつに多様な観点からフランスの過去と現在について研究を推進したいと考えている。また、いずれの主題を扱う場合にも、実証的方法を重視している。
言語学講座	本講座では、人間言語の精緻な観察を通して、深い人間理解に至ることを目指している。言語学の研究対象にはさまざまなタイプのものがあり、ふさわしいアプローチもさまざまである。本講座の教員は、それぞれ異なった研究対象を専門としているが、理論と実証の両面を重視しているというのが共通した基本方針であり、特に修士課程では、指導教員以外の授業にも積極的に参加することを強く推奨している。講座の構成員全員が議論に参加する授業も週１度あり、京都大学との院生交換研究発表会も毎年行われている。 （人文科学研究院ホームページ）

３．研究組織運営に関する方針（MP、マネジメント・ポリシー）

本研究院では次の様にマネジメント・ポリシーを取り決め（資料８）、それを実行している。

○資料８　本研究院の MP

人文科学研究院　マネジメント・ポリシー

①研究組織・体制：　人文学の一大研究拠点たるに相応しい、優れた学術研究活動を保ち、促進するため、将来計画委員会が中心になって研究組織・体制の見直しを積極的に行う。
②支援・推進体制：　サバティカル制度の推進、助教ポストの活用の見直し、OP に適合する外国人研究者の積極的な招聘、男女共同参画に関する指針の遵守など、より高い研究水準を達成するための様々な研究支援・推進体制の整備を、将来計画委員会の主導により、各委員会が連携して積極的に行う。
③内部質保証（評価・改善）：　大学評価情報システムや大学評価・法人評価を活用し、研究活動に関する客観的なデータを蓄積し、自己点検・評価によりデータを分析し、研究院長のリーダーシップにより改善を行い、研究の質保証を図る。
④情報公開：　広報委員会は、ホームページや学術情報リポジトリ等による研究成果の公開を積極的に行い、成果の可能な限り広範囲の利用を図る。

（人文科学研究院ホームページ）

４．研究基盤整備に関する方針（IP、インフラストラクチャー・ポリシー）

本研究院では次の様にインフラストラクチャー・ポリシーを取り決め（資料９）、実行している。

○資料９　本研究院の IP

人文科学研究院　インフラストラクチャー・ポリシー

①研究施設・設備：　人文学の全研究の土台である図書に関しては図書委員会、その他の施設に関しては施設委員会が、研究環境の整備を行う。
②研究資金調達：　外部資金の調達に関して、特に科研費獲得のための戦略的な取組を研究院長のリーダーシップにより積極的に行う。

（人文科学研究院ホームページ）

人文学の基礎としての文献学研究では、長年にわたり蓄積された図書資料の量と質が組織全体の研究の質と量を左右する。そのため本研究院では研究基盤整備に関する方針に従い、獲得した外部資金等を用いて図書資料の充実に力を注ぎ、その結果、文学部図書室は人文学の領域では日本でも指折りの圧倒的な量と質をもつ蔵書を形成しつつある。

このように、本研究院は**研究目的**、その目的を達成するための**研究成果の方針**、その達成のために施策を企画し実行する**組織運営の方針**と、**研究基盤整備の方針**を定め、実行している。

以上の研究目的と特徴は、本学の中期目標記載の基本的な目標「研究においては、卓越した研究者が集い成長していく学術環境を充実させ、世界的水準での魅力ある研究や新しい学問分野・融合研究の発展及び創成を促進する。また、環境・エネルギー・健康問題等人類が抱える諸課題を総合的に解決するための研究を強力に推進し、国際社会・国・地域の持続可能な発展に貢献する。」を踏まえている。

［想定する関係者とその期待］

前述した目的及び理念（前掲資料２、２頁）等を明確に定めつつ、それを実現することを任務とするが、この任務は本研究院への**国民の期待**と合致するものである。

学術面においては、アジア研究と精緻な文献学の研究を中心として、各部門・各講座それぞれの研究成果の方針に沿った研究を行うことによって、人文学諸分野の関連学会において先導的な役割を果たし、国際社会における学術的貢献に努めることが**学界から期待されている**。**教育面においては**、最新の研究成果を絶えず学部・学府の学生に還元することが期待されている。

さらに**社会、経済、文化面において**、国や地方自治体、地域社会にその研究成果を還元することによって、学術文化の発展に寄与することが**国や地方等から期待されている**。

Ⅱ　「研究の水準」の分析・判定

分析項目Ⅰ　研究活動の状況

観点１－１　研究活動の状況

（観点に係る状況）

１－１－（１）　論文・著書等の研究業績や学会での研究発表の状況

それぞれの学問分野において活発な研究発表がなされている。６年間の論文数、著書数、学会での発表数を見ると（資料 10～12)、を示す。第１期評価期間では年平均の論文数は 89 本、著書数は 16.5 本、発表数は 65 回であったが、この第２期（22～27 年度）の６年の年平均の論文数は 69 本、著書数は 21.7 本、発表数は 78 回である。このように第１期の高い水準の状況は第２期でも維持されていることが確認できる。また国際的な舞台での発表数は全体的に第１期より増えている。

○資料 10　論文の発表状況

部門	査読	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
哲学部門	査読有	10	14	6	8	6	6
哲学部門	査読無	17	13	20	13	11	7
文学部門	査読有	13	12	16	11	10	8
文学部門	査読無	15	10	13	7	4	3
歴史学部門	査読有	7	6	4	6	9	3
歴史学部門	査読無	21	29	31	20	13	11
合計		83	84	90	65	53	38

○資料 11　著書等の公表状況

部門	種類	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
哲学部門	一般書	2	2	2	3	1	1
哲学部門	専門書	2	3	1	3	3	1
文学部門	一般書	0	1	2	2	2	0
文学部門	専門書	4	10	7	6	10	4
歴史学部門	一般書	4	4	9	6	8	1
歴史学部門	専門書	6	3	3	7	4	3
合計		18	23	24	27	28	10

○資料 12　学会での研究発表等の状況

部門	種類	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
哲学部門	国際	11	13	13	14	10	11
哲学部門	国内	15	5	6	12	9	3
文学部門	国際	3	2	4	3	6	9
文学部門	国内	15	12	22	20	16	13
歴史学部門	国際	19	13	21	22	18	13
歴史学部門	国内	23	19	21	23	19	11
合計		86	64	87	94	78	60

参考：本研究院３部門の教員数の推移

部門	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
哲学部門	14	15	14	14	14	13
文学部門	17	17	16	16	16	15
歴史学部門	18	18	18	17	18	17
合計	49	50	48	47	48	45

１－１－（２）　競争的資金受入状況、受託研究受入状況、寄附金受入状況

科学研究費補助金については、全教員が毎年新規もしくは継続で申請することを義務づけている。獲得額は毎年ほぼ横ばい傾向にあるが、平成 22～26 年度の５年間に、件数は年平均 50.6 件、金額は年平均 80,152 千円であり、高い水準を保っている（資料 13）。

科研費以外の競争的資金も毎年受け入れて科研費を補完し（資料 14）、受託研究（資料 15）と寄附金（資料 16）も適宜受け入れている。

○資料 13　科学研究費補助金受入状況

		平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
基盤研究（A）	件数	2	2	1	1	2
	直接経費	21200	18300	6100	2200	8900
	間接経費	6360	5490	1830	660	2670
	合計	27560	23790	7930	2860	11570
基盤研究（B）	件数	5	6	6	5	7
	直接経費	15700	16500	16500	12700	17400
	間接経費	4710	4950	4950	3810	5220
	合計	20410	21450	21450	16510	22620
基盤研究（C）	件数	16	24	25	24	20
	直接経費	14400	23900	22800	21500	16800
	間接経費	4320	7170	6840	6450	5040
	合計	18720	31070	29640	27950	21840
若手研究（A）	件数	1	1	2	3	1
	直接経費	1100	1100	1500	4500	1400
	間接経費	330	330	450	1350	420
	合計	1430	1430	1950	5850	1820
若手研究（B）	件数	9	10	5	7	6
	直接経費	7500	7600	3900	4100	4200
	間接経費	2250	2280	1170	1230	1260
	合計	9750	9880	5070	5330	5460
特別研究員奨励費	件数	12	15	11	9	9
	直接経費	7600	9700	7200	7000	7800
	間接経費	0	0	0	0	660
	合計	7600	9700	7200	7000	8460
若手研究(スタートアップ)	件数	1	1	1	2	1
	直接経費	1130	910	1200	1900	600
	間接経費	339	273	360	570	180
	合計	1469	1183	1560	2470	780

○資料 14　科研費以外の競争的資金受入状況

競争的資金の種別		平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
北海道大学情報基盤センター共同研究	件数				1		
	金額				420,000		
国立国語研究所共同研究プロジェクト	件数	1	1	1	1		
	金額	1,000,000	3,000,000	4,000,000	2,000,000		
国際学会派遣支援	件数		1	1			1
	金額		340,000	200,000			350,000
国際学会派遣支援	件数			1	1	1	1
	金額			約 300,000	約 300,000	約 300,000	約 75,000
社会貢献・研究補助者支援	件数					1	1
	金額					410,000	410,000
研究者短期招聘・派遣プログラム	件数					1	
	金額					310,964	
九州大学 P&P	件数			1	1		2
	金額			4,850,000	4,150,000		1,864
東北亜歴史財団（韓国）助成金	件数			1			
	金額			320,000（分担）			

○資料 15　受託研究受入状況

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
件数	1	0	2	2	1	0
金額	380,000	0	3,870,000	2,690,000	1,690,000	0

○資料 16　寄附金受入状況

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
件数	1	1	2	2	2	2
金額	600,000	600,000	866,525	800,000	20,200,000	2,322,000

１－１－（３）　競争的資金による研究実施状況、受託研究の実施状況

科研費補助金に基づいた研究は３部門 19 講座の全体において、偏ることなく、よく行われている（資料 17）。採択状況は良好であり、研究課題においては、アジア関連の多様な研究がよく取り組まれているが（資料 18）、これは OP のとおりに、特にアジア関連の研究課題に強みを発揮して科研費を獲得し、それに基づく研究を活発に行っていることを示すものである。

○資料 17　科研費の採択による研究の実施状況（大型科研の採択状況）

年度	研究種目	課題番号	研究代表者	研究題目	交付金合計
20～22	基盤（B）	19320098	坂上康俊（歴史学部門）	前近代東アジアにおける文書とその伝来に関する比較史的研究	12,220 千円
21～23	基盤（A）	21251006	久保智之（文学部門）	地球化時代におけるアルタイ諸語の急速な変容・消滅に関する総合的調査研究	48,100 千円
21～23	基盤（B）	21320159	高木彰彦（歴史学部門）	公共性とガバナンスからみた近・現代社会の空間編成に関する研究	14,870 千円
22～24	基盤（A）	21251008	宮本一夫（歴史学部門）	中国西南地区における北方系青銅器文化の生成と展開	27,170 千円
22～24	基盤（B）	22401029	中島楽章（歴史学部門）	西欧・中国・日本史料による 16-17 世紀東アジア海域史の総合的研究	12,270 千円
22～25	若手研究（A）	22682005	森平雅彦（歴史学部門）	中世朝鮮の国際関係と陸海交通路	5,850 千円
23～25	基盤（B）	2332003	井手誠之輔（哲学部門）	南宋絵画史における仏画の位相―都と地域、中国と周縁―	11960 千円
23～26	基盤（B）	23320171	辻田淳一郎（歴史学部門）	「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に	7,670 千円
24～26	基盤（B）	24320140	清水和裕（歴史学部門）	ユーラシア諸帝国における君主と事軍集団の展開－境界を越える「武人」とその紐帯	15730 千円
24～27	基盤（B）	24320079	久保智之（文学部門）	シベ語の体系的文法と辞書の作成	13,780 千円
25～28	基盤（B）	25284115	中島楽章（歴史学部門）	16-17 世紀東アジア海域の交易秩序と人の移動	4,940 千円
26～27	基盤（A）	26244010	井手誠之輔（哲学部門）	作品誌の観点による大徳寺伝来五百羅漢図の総合的研究	9,620 千円
26～28	基盤（B）	26284132	遠城明雄（歴史学部門）	「コモンズ」をめぐる思想・理論・社会的実践に関する地理学的研究	6,200 千円
27	基盤（A）	15H02608	宮本一夫（歴史学部門）	ユーラシア東部草原地帯における騎馬遊牧社会形成過程の総合的研究	9,620 千円
27	基盤（B）	15H03266	宮本一夫（歴史学部門）	東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究	4,550 千円
23～25	若手研究（A）	23682001	Ellen Van Goethem（哲学部門）	日本古代・中世の敷地選定	5,330 千円
27～30	若手研究（A）	15H05376	Ellen Van Goethem（哲学部門）	Site Divination Practices in Premodern East Asia	1,430 千円（H27 のみ）
26～30	基盤（B）	26284048	小黒康正（文学部門）	ドイツの文学・思想におけるトポスとしての「黙示録文化」―「終末」の終末は可能か―	10,600 千円

○資料 18　取得した科研費のうちアジアを対象にした研究の実施状況
（上記の大型科研の表に含まれるものは除く）

年度	研究種目	課題番号	研究代表者	研究題目	交付金合計
20～22	基盤研究（C）	20520171	川平敏文（文学部門）	林羅山を中心とした江戸初期儒学者の日本古典文学研究についての考察	2,210 千円
22	特別研究員奨励費（外国人招聘事業）	08F08303	井手誠之輔（哲学部門）	東アジアにおける高麗美術の領分―写経と仏画の観点から―	300 千円
22～25	基盤研究（C）	22520769	宮本一夫（歴史学部門）	遼東半島土器編年からみた弥生開始期の実年代研究	4,290 千円
23	基盤研究（C）	21520678	岩﨑義則（歴史学部門）	随筆『甲子夜話』全文検索システムの構築と公開に関する研究	1,040 千円
23～25	基盤研究（C）	23520124	後小路雅弘（哲学部門）	アジア近代美術における「ローカルカラー」と「アイデンティティ」	5,070 千円

				形成	
23～25	基盤研究(C)	23520067	片岡啓 （哲学部門）	インド哲学文献に見る言葉の意味をめぐる論争史	5,330 千円
23～25	基盤研究(C)	23520229	川平敏文 （文学部門）	江戸前期の思想・文芸における老荘思想の受容についての研究	2,600 千円
25～29	基盤研究(C)	25370781	坂上康俊 （歴史学部門）	日本における古代・中世移行期村落の構造と展開	4,940 千円
26～29	基盤研究(C)	26370241	川平敏文 （文学部門）	室鳩巣の和文著述とその流布・影響についての研究	3,250 千円
24～25	スタート支援	24820031	Cynthea J. Bogel （哲学部門）	日本古代密教視覚文化と寺院	1,560 千円
24～26	基盤研究(C)	24520758	山口輝臣 （歴史学部門）	国体と仏教－日本近代史における仏教の再定位に向けて	2,300 千円
26～28	基盤研究(C)	26370137	後小路雅弘 （哲学部門）	東南アジアにおける美術史学の成立に関する基礎的研究	4,940 千円
26～29	基盤研究(C)	26370135	Cynthea J. Bogel （哲学部門）	奈良時代寺院と仏教美術に関する未開拓の基礎的研究-密教と神仏習合を中心に	4,940 千円
27	基盤研究(C)	60334273	片岡啓 （哲学部門）	インド哲学における真理論と誤謬論の文献学的研究	1,170 千円
27～29	基盤研究(C)	15K02835	山口輝臣 （歴史学部門）	〈日本宗教史〉の宗教史－近代日本宗教史の通史にむけて	2,000 千円
24～28	基盤研究(C)	24520054	岡野潔 （哲学部門）	アヴァダーナ説話集の校訂研究	2,320 千円
19～22	基盤研究(C)	19520052	岡野潔 （哲学部門）	中世インド・ネパールの梵語仏教文献の研究	2,100 千円
27～30	基盤研究(C)	15K02902	森平雅彦 （歴史学部門）	朝鮮史における「モンゴル時代」の意義に関する王権論的研究	3,380 千円
27～29	基盤研究(C)	,15K02866	岩﨑義則 （歴史学部門）	平戸藩楽歳堂文庫をめぐる書物環境と文庫形成過程に関する基盤的研究	4,420 千円
26	基盤研究(C)	26370826	舩田善之 （歴史学部門）	文献・戦跡・遺物の総合的分析に基づくモンゴル－宋戦争の研究	4,940 千円
24～26	基盤研究(C)	23520952	今里悟之 （歴史学部門）	村落耕地の極微細地名における地域差及び集落差とその自然的・社会的条件	3,900 千円
27～30	基盤研究(C)	15K03011	今里悟之 （歴史学部門）	日本村落における一筆耕地呼称の流通範囲と歴史的変遷過程	3,600 千円
22～25	若手研究(B)	22720270	舩田善之 （歴史学部門）	出土資料・石刻史料の分析によるモンゴル帝国時代華北多元社会の展開の解明	3,900 千円
22～25	若手研究(B)	22720161	下地理則 （文学部門）	琉球語与那国島方言の記述文法書の作成	3,250 千円

科研費以外の競争的資金（資料 19）や受託研究（資料 20）による研究も活発である。

○資料 19　競争的資金（科研費以外）による研究の実施状況

競争的資金	教員名	研究実施状況
北海道大学情報基盤センター共同研究	上山あゆみ （文学部門）	北海道大学情報基盤センター赤間清教授との共同研究
国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語文法の歴史的研究」	青木博史 （文学部門）	研究発表会（年２回）の実施； 論文集『日本語文法の歴史と変化』（青木博史編、くろしお出版、2011 年）の発刊
九州大学 P&P	宮本一夫 （歴史学部門）	モンゴル考古学研究所との共同発掘調査
九州大学 P&P H26	Ellen Van Goethem （哲学部門）	Shijin Sōō 四神相応 in East Asia: An Urban or Private Site Selection Model? （H26, no. 26301）

九州大学 P&P H27 研究分担者	Ellen Van Goethem（哲学部門） Cynthea J. Bogel（哲学部門）	歴史的背景から見た複製の可能性　八世紀の薬師寺金堂薬師如来三尊像台座をめぐって 研究代表者: Cynthea Bogel
九州大学 P&P H27 研究分担者	Ellen Van Goethem（哲学部門） Cynthea J. Bogel（哲学部門）	Ancient Borders and Crossroads: Transmission, Traces, and Omissions 研究代表者: William Matsuda
国際学会派遣支援 H23	Ellen Van Goethem（哲学部門）	Conference presentation EAJS Tallinn, Estonia
国際学会派遣支援 H24	Ellen Van Goethem（哲学部門）	Conference presentation International Conference on Feng Shui （Kan Yu） in Theory and Building Practice Berlin, Germany
国際学会派遣支援 H27	Ellen Van Goethem（哲学部門）	Conference presentation ICAS 9 Adelaide, Australia
研究者短期招聘・派遣プログラム	Ellen Van Goethem（哲学部門）	Joint research with Dr Michael Paton on site divination in ancient China
九州大学 P&P H25	Cynthea J. Bogel（哲学部門）	奈良時代の古密教と神仏習合を異世界の視点から研究
九州大学 P&P　H26	Cynthea J. Bogel（哲学部門）	初期密教における視覚文化史に関する基礎的研究
国際学会派遣支援 H26	Cynthea J. Bogel（哲学部門）	Conference Presentations, Kyoto University. International Workshop on Traditional Sciences in Asia 2015 （Kyoto） and The Nineteenth Asian Studies Conference Japan （ASCJ）, Meiji Gakuin University （Tokyo）
国際学会派遣支援 H26	Cynthea J. Bogel（哲学部門）	Conference presentation, Association for Asian Studies （Philadelphia, USA）
国際学会派遣支援 H25	Cynthea J. Bogel（哲学部門）	Conference presentation, Association for Asian Studies （San Diego, USA）
国際学会派遣支援 H24	Cynthea J. Bogel（哲学部門）	Conference presentation, Freie Universität, Institute for the History of Religions, *The Reception of Greek and Roman Culture in East Asia: Texts & Artefacts, Institutions & Practices* （Berlin, Germany）
平成 27 年度第２回研究者短期招聘・派遣プログラム	Cynthea J. Bogel（哲学部門）	Thangka Conservation & Preservation Center of Bhutan and The Royal University of Bhutan
韓国国際交流財団助成：朝鮮半島グローバル・ヒストリーの構築（代表：濱田耕策）	濱田耕策・森平雅彦（歴史学部門）	朝鮮史上の事象をグローバルな視点から捉え直し、これを日韓の研究者、特に若手研究者・院生との相互討議を通じて未来志向の認識深化を図った。 高麗大学校韓国史学科とのワークショップ（2012 年度４回、2013 年度３回） 市民講座（2012 年度２回、2013 年度１回） 次世代研究者研究発表会（2012 年度１回） 鹿児島での国際合同現地調査（2013 年度１回）
韓国国際交流財団助成：韓国歴史ドラマからみる言説研究（代表：中野等）	森平雅彦（歴史学部門）	日韓の一般大衆の朝鮮史認識に大きな影響をあたえている韓国歴史ドラマと史実との関係、そこでの言説の特質を浮き彫りにし、日韓の相互認識・文化交流の深化に資することを目的とする。 2015 年度予定：キックオフ・ワークショップ、韓国訪問ワークショップ・講演会、市民講座 各１回
東北亜歴史財団助成：13～14 世紀麗蒙関係史研究（代表：李玠奭）	森平雅彦（歴史学部門）	高麗・モンゴル関係の研究史の特徴と課題を、韓国、日本、中国、モンゴルの地域別に体系的に整理（森平は日本を担当）、公開シンポジウムを実施したうえで、報告書として提出。
三菱財団人文科学助成：H26「寺内正毅関係文書」の基礎的研究（代表：千葉功）	山口輝臣（歴史学部門）	寺内正毅関係文書研究会を立ち上げ、同文書の整理と翻刻を行う。2015 年度中にその成果の一端が勉制出版より刊行される。

○資料 20　受託研究の実施状況

受託研究	教員名	研究実施状況	金額
文献と方言の両面からのアプローチによる日本語文法史研究	青木博史 （文学部門）	・若手の学術研究員を１名雇用し、文献学的研究・歴史言語学的研究を行った。 ・RA を１名雇用し、文献学的研究・方言学的研究を行った。	H24 年度 2,000 千円 H25 年度 1.000 千円
平成 24 年度「人文地理学分野に関する学術研究動向に関する調査研究」	高木彰彦 （歴史学部門）	人文地理学の内外における学術研究動向を調査し報告した。	1,700 千円
平成 25 年度「人文地理学分野にかかる学術研究動向に関する調査研究」	高木彰彦 （歴史学部門）	人文地理学の内外における学術研究動向を調査し報告した。	1,300 千円
平成 26 年度「人文地理学分野にかかる学術研究動向に関する調査研究」	高木彰彦 （歴史学部門）	人文地理学の内外における学術研究動向を調査し報告した。	1,300 千円

学内において研究費等の重点配分を行う「教育研究プログラム・研究拠点形成プログラム」(P&P)（資料 21 参照）に採択された研究も行っている（資料 22)。アジア・日本研究の推進がその特徴となっている。

○資料 21　P&P（教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト）

P&P（教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト）は、一定の期間、研究費等の重点配分を行い、教育と研究の一層の発展を図ることを目的とする九州大学独自の研究支援制度。集中的に支援することで、研究の一層の発展を促し、新たな競争的資金の獲得の原動力となっている。

○資料 22　本学教育研究プログラム研究拠点形成プロジェクト（P&P）採択状況

期間	研究代表者	研究課題	金額
平成 26～27 年	Cynthea J. Bogel （哲学部門）	奈良時代の古密教と神仏習合を異世界の視点から研究	849 千円
平成 25～26 年	Cynthea J. Bogel （哲学部門）	初期密教における視覚文化史に関する基礎的研究	950 千円
平成 26 年９月～27 年３月	Van Goethem Ellen （哲学部門）	Shijin Sōō 四神相応 in East Asia: An Urban or Private Site Selection Model?	1,200 千円
平成 24～25 年	宮本一夫 （歴史学部門）	モンゴル高原における古代牧畜民の移住と集団再編に関する総合的研究	9,000 千円
平成 27 年	Cynthea J. Bogel （哲学部門）	歴史的背景から見た複製の可能性　八世紀の薬師寺金堂薬師如来三尊像台座をめぐって	664 千円
平成 27 年	William Matsuda	Ancient Borders and Crossroads: Transmission, Traces, and Omissions	1,200 千円

以上、IP どおりに研究資金を調達し、研究活動を実施していることを確認した。

１－１－（４）　その他研究目的に沿った研究活動の状況

研究目的に沿って、学内外の多様な研究活動を展開している。研究と関連する活動（資料 23）を、成果の社会還元の一環として積極的に行い、社会との連携・協力を推進している。

○資料 23　その他研究目的に沿った研究活動の状況

研究活動	研究者	研究実施状況
アジア現代美術展の企画実施	後小路雅弘	福岡市文化藝術振興財団の依頼によりアジア現代美術展を福岡アジア美術館等にて開催（平成 22 年度～25 年度)。
福岡県桂川町･金	辻田淳一郎	科学研究費 基盤研究（B）の一環として、桂川町教育委員会と

比羅山古墳の発掘調査		考古学講座の共同で桂川町所在の金比羅山古墳の測量・発掘調査を実施（平成 23～26 年度）
学術同人誌の編纂・出版	川平敏文	学術同人誌『雅俗』（年一回刊行、査読付）を編集・刊行している。
古典の教育･普及に関する研究	川平敏文	小学校高学年～中学生に、古典文学をどのように教育・普及させていくかについて、学生と勉強会をしている（週一回）。
展示の企画･図録作成	川平敏文	平成 27 年 5 月 11～18 日に本学附属図書館にて開催された「雅俗繚乱」展の企画、及びその図録執筆を担当した。
プロシーディングスの編集･刊行	青木博史	筑紫日本語研究会のプロシーディングス（発表原稿集）『筑紫日本語研究』を、2010 年度より編集・刊行している。
第 65 回美学会全国大会ポスター	東口豊	ポスターデザインの制作
翻訳（和英）	Ellen Van Goethem	Igarashi Taro and Yamazaki Ryo, *Architecture since 3.11,* Kanazawa: 21st Century Museum of Contemporary Art, 2014 (with Thomas Daniell)
翻訳（和英）	Ellen Van Goethem	Hans-Ulrich Obrist and Rem Koolhaas, *Rem Koolhaas: Project Japan: An Oral History of Metabolism*, Los Angeles: Taschen America, 2011 (with Thomas Daniell, 684 pp.)
翻訳（和英）	Ellen Van Goethem	Tadao Ando, *Tadao Ando O Process and Idea*, Tokyo: Toto Shuppan, 2010 (with Thomas Daniell, 320 pp.)
エッセイ	Ellen Van Goethem	「飛鳥・藤原」世界遺産化応援エッセー ‘Asuka-Fujiwara: The Beginning of Japanese History’, 『世界に伝えたい飛鳥・藤原の魅力記念講演資料集 2015』（明治大学日本古代学研究所・世界遺産「藤原・飛鳥」登録推進協議会）、35、2015.
本の翻訳（和英）現在出版社の決定待ち	Cynthea J. Bogel	水野敬三郎 『奈良･京都の古寺めぐり―仏像の見かた』岩波ジュニア新書 89: 1985 （第 41 刷改版発行 2012）. *Nara · Kyoto no koji meguri: Traversing the Ancient Temples of Nara and Kyoto.*
出版物の査読委員、テニュア（tenure）審査委員	Cynthea J. Bogel	Brill 出版社、ハワイ大学出版社など；アメリカの大学
学術誌の編纂･出版	Cynthea J. Bogel	『Asian Humanities』雑誌（広人文学コースに事務局置く）
学術誌の編纂･出版	Ellen Van Goethem	『Asian Humanities』雑誌（広人文学コースに事務局置く）
翻訳	小黒康正	ヘルタ・ミュラー『心獣』、三修社、2014 年、308 頁。

国内外の機関との共同研究も、国内、アジア圏、欧米圏の研究者・研究機関との共同研究を講座単位で積極的に進めている（資料 24）。国内より国外、とりわけアジア圏との間で行われたものが多い。また科研費などの競争的資金を獲得して推進したものが多い。

○資料24　国際的及び他大学との共同研究の講座別実施状況

講座名	研究概要	実施年
朝鮮史学講座	・韓国国際交流財団助成プロジェクト「朝鮮半島グローバル・ヒストリーの構築」（代表：濱田耕策教授、分担：森平雅彦准教授）による韓国・高麗大学校韓国史学科（崔徳寿教授）との共同研究 ・韓国・韓国学中央研究院（辛鍾遠教授・具蘭姫教授）との共同研究「東アジア学問共同体のための次世代研究者の模索」	H24～25 H26
考古学講座	・科研費（代表：宮本一夫）による中国・四川省文物考古研究院（高大倫考古研究院院長）との共同研究 ・科研費（代表：宮本一夫）によるモンゴル国科学アカデミー考古研究所（B.Tsogtabaatar 研究員（教授相当））との共同研究 ・科研費（代表：辻田淳一郎准教授、分担：宮本一夫教授）による桃崎祐輔（福岡大学教授）・重藤輝行（佐賀大学教授）・橋本達也（鹿児島大学准教授）をはじめとした九州各地の考古学研究者との共同研究 ・科研費（代表：宮本一夫教授）による中国・山東大学東方考古研究センター（欒豊実教授）との共同研究	H19～24 H24～ H23～26 H27～

イスラム文明史学講座	・東京大学東洋文化研究所とのマイケル・クック教授（米プリンストン大学）招聘	H25
地理学講座	・科研費（代表：高木彰彦教授）を利用した大阪市立大学との共同研究により『空間・社会・地理思想』を刊行 ・科研費（代表：遠城明雄教授）を利用した大阪市立大学との共同研究により『空間・社会・地理思想』を刊行	H21～23 H26～28
東洋史学講座	・台湾・中央研究院人文社会科学研究中心（朱徳蘭研究員・劉序楓研究員）との共同研究 ・中国・清華大学歴史系 Centre of Global Studies（Assistant Chair, Manuel Perez Garcia）との共同研究 ・アメリカ・Azusa Pacific University（Associate Professor, James Fujitani）との共同研究 ・中国・吉林大学文学院中国史系（高福順教授）の招聘、共同研究、講演会開催（中国東北民族史、東アジア地域史、古代中国・朝鮮関係史） ・科研費（代表：舩田善之）による中国・陝西師範大学西北歴史環境与経済社会発展研究院（李大海講師）、大谷大学文学部（井黒忍講師）との共同研究 ・米国・インディアナ大学（クリストファー・アトウッド准教授）との共同研究	
独文学講座	・ドイツ・ビーレフェルト大学のヴォルフガング・ブラウンガルト教授や早稲田大学のアルネ・クラヴィッター教授らと共同で行う国際コロキウム（Das internationale Kolloquium des germanistischen Seminars an der Universität Kyushu: Die apokalyptische Kultur als Topos in der deutschen Literatur und Geistesgeschichte. Ist das ‚Ende' vom Ende möglich?）	H27～
中国文学講座	・中国・中山大学中文系（戚世雋教授）との共同研究（中国近代戯曲研究） ・中国・北京大学中文系（杜暁勤教授）との共同研究（唐詩研究） ・中国・北京大学中文系（林嵩教授）との共同研究（中国小説史研究） ・中国・復旦大学中文系（査屏球教授）との共同研究（唐宋文化史研究）	H22～23 H24 H25 H26～27
国語学・国文学講座	・中国・揚州大学外国語学院（金京愛講師）との共同研究（日本語の複文研究） ・イギリス・オックスフォード大学 Bjarke Frellesvig 教授との共同研究（日本語の複合動詞史研究）	H27 H26～

また、本学の「大学・部局間交流協定等推進事業」並びに「progress100」を活用し、積極的な外国人研究者の招聘を行っている（資料25）。

○資料 25　特定プロジェクト教員（平成 27 年度）

招かれた外国人教員	身分	国籍	専門領域	雇用期間
William J. Matsuda	准教授	米国	日本古典文学	H27.4.1 ～H28.3.31
Lindsey Dewitt	助教	米国	日本宗教史	H27.4.1.～H28.3.31
（説明）平成 27 年度には、大学・部局間交流協定等推進事業（外国人教員を３ヶ月から１年の間招聘して雇う制度）にかかる特定プロジェクト教員として、准教授・助教各１名を採用した。また、progress100（世界トップレベル研究者招へいプログラム）（資料 26 参照）に採用された３名の外国人教員の招聘も同時に行った。本研究院におけるアジア研究の国際化を推進するのがその目的である。特定プロジェクト教員については翌年度にも別の５名を招聘することも既に決まっている。				

○資料26　Progress100（世界トップレベル研究者招聘プログラム）

THE世界ランキング100位以内の海外大学からトップレベル研究者を招聘し、本学との共同研究や共著論文の執筆、大学院生等への教育を通じて、世界的なプレゼンスを向上させるプログラムで、平成26年度から実施している。

５年間の本学21世紀COEプログラム「東アジアと日本：交流と変容」は平成18年度に終了したが、その成果はその後も本研究院の教育・研究・国際交流・社会連携の各方面に活かして、継承している（資料27～29）。

○資料27　21世紀COEプログラムを継承する成果

成果１：　教育面の「歴史学拠点コース」は、二つの部局にまたがる歴史学関連の教員・大学院生が分野横断的に教育の場をともにする試みとして、全国的にもまれな取り組みとして注目される。

成果２：　社会連携における「歴史学・歴史教育セミナー」は、九州一円の高校教員（一部中学社会科教員を含む）に加え、遠くは関西圏・関東圏からも多くの参加者を得て、教育現場関係者から好評を博した。類似の取り組みを行っている関西圏・関東圏の大学・研究者からも注目されており、現在取り沙汰されている高校歴史教育の再編問題においても寄与するところが大きいと期待される。実際、こうした実社会との対話を通じて得られた成果は、本学文学部の個別学力試験において平成27年度より地理歴史科目を導入するにあたっても活かされている。

成果３：　COEプログラムを通じて構築された国際連携「東アジア史研究コンソーシアム」（資料18を参照）は、事業終了後も、関係教員の努力により、別途競争的資金を獲得するなどして旺盛な活動を維持していることは特筆に値する。とりわけ、教員レベルの研究交流にとどまらず、大学院生を対象とする教育交流の機会としても機能し、それが相互的な留学にまで発展している点は重要である。

○資料28　東アジア史研究コンソーシアム締結研究機関・大学一覧

国名	機関・大学名
中華人民共和国	中国社会科学院、北京大学、山東大学、復旦大学、華東師範大学、南京大学
大韓民国	韓国学中央研究院東北亜古代史研究所、東亜大学校、釜山大学校、全北大学校
連合王国	セインズベリー日本芸術文化研究所
米国	ボストン大学

※「東アジア史研究コンソーシアム」とは、本学と諸外国の大学・研究期間の間に結ばれたアカデミック・ネットワークであり、東アジア史に関する国際的な共同研究・調査、国際会議、相互訪問による集中講義や院生ワークショップを行うものである。

○資料29　現在の21世紀COEプログラムを継承する諸研究の実施状況

・事業推進担当教員及び協力教員は、「東アジアと日本：交流と変容」（本学21世紀COEプログラム）の延長にある各自の研究テーマに関して、継続して研究を行い、論文・著書を刊行している。
・プログラムの終了後、人文科学府と比較社会文化学府（現地球社会統合科学府）にまたがる「歴史学拠点コース」を立ち上げ、年２回の定例会議とともに、複数の分野にまたがる領域横断ゼミを実施して、各教員や大学院生の研究に関する情報の交換・共有につとめ、研究の広がりを図って来た。
・「歴史学拠点コース」では、毎年、高等学校の歴史学教員を対象とした「歴史学・歴史教育セミナー」を実施し（平成26年度まで）、研究成果の社会への還元を図った。
・プログラムを通じて立ち上げた東アジア史研究コンソーシアムの締結機関との間では、プログラム終了後も良好な関係を維持し、平成22年度以降では次のような行事・交流を実施している。
（１）　科研費・基盤研究（B）（代表：坂上康俊）によるワークショップ「前近代東アジアにおける文書の伝来」に劉迎勝教授（南京大学）・安承俊古典資料情報学室長（韓国学中央研究院）・金東哲教授（釜山大学校）を招聘（平成23年１月８日）。
（２）　朝鮮史学講座の教員・院生が韓国学中央研究院を訪問、附設図書館蔵書閣で古文書・古文献の収集・整理作業を見学。（平成25年２月19日）
（３）　朝鮮史学講座の教員・院生が韓国学中央研究院の教員・院生と共同研究「東アジア学問共同体のための次世代研究者の模索」を実施。（平成26年９月24日）
（４）　東洋史学講座教員（舩田善之講師）が北京において北京大学、中国社会科学院の関係者と研究交流（平成24年３月９日）、南京大学主催シンポジウムに出席（平成26年８月６日）。
（５）　南京大学より３名、華東師範大学より１名、復旦大学より１名の大学院生が東洋史学講座に留学。東洋史学講座の大学院生２名が復旦大学、１名が華東師範大学に留学。
（６）　考古学講座の教員が科研費・基盤研究（B）（代表：宮本一夫教授）により山東大学と共同研究。（平成27年度）

ほぼ全ての講座において、一つ以上の学会・研究会の事務局を置き、**西日本地区の人文学の諸研究活動の拠点**として活動している（資料30）。運営する学会をもたない講座はなく、これが本研究院の大きな特徴になっている。

○資料30　各講座に事務局を置く学会・研究会等

哲学講座	九州大学哲学会 西日本哲学会	西洋史学講座	九州史学会西洋史部会
倫理学講座	九州大学哲学会	イスラム文明史学講座	九州史学会イスラム文明部会
インド哲学史講座	西日本インド学仏教学会 九州地区インド学仏教学研究会	国語学・国文学講座	九州大学国語国文学会 筑紫日本語研究会 九州近世文学研究会
中国哲学史講座	中哲懇話会 明儒学案研究会	中国文学講座	中国文芸座談会 九州大学中国文学会
芸術学講座	九州芸術学会 九州大学芸術学研究会 アジア近現代美術研究会	英語学・英文学講座	九大英文学会 イギリス文学研究会 日本ヴァージニア・ウルフ協会（平成25、26年） 日本英文学会九州支部
日本史学講座	九州史学研究会 九州史学会日本史部会	独文学講座	九州大学独文学会 トーマス・マン研究会
東洋史学講座	東洋史研究会 九州史学会東洋史部会	仏文学講座	九州大学フランス語フランス文学研究会
朝鮮史学講座	九州大学朝鮮学研究会 九州史学会朝鮮学部会 朝鮮中近世史料講読会	言語学講座	九州大学言語学研究会
地理学講座	九州大学地理学研究会	考古学講座	日本中国考古学会（平成24年度まで） 九州史学会考古学部会

各講座においても、研究集会や研究会を活発に行っている（資料31、32)。また、各部門や部門共同で、共同研究のための研究会を活発に開催している（資料33)。

○資料31　研究集会等の講座別開催状況

講　座　名	研究・集会等の名称及び開催頻度
哲学講座	・哲学講座研究発表夏期合宿研修会（年１回） ・九州大学哲学会（年１回）
倫理学講座	・九州大学哲学会（年１回） ・実在論ワークショップ（年１回；2013 知覚と倫理ワークショップ、2014 実在と倫理ワークショップ）
インド哲学史講座	・九州地区インド学仏教学研究会（年１回）
芸術学講座	・金曜会（週１回、年 24 回） ・九州大学藝芸術学研究会（年２回） ・九州美学研究会（第２回研究会を 2013 年 12 月１日に開催）
朝鮮史学講座	・九州史学会（大会 年１回、朝鮮学部会 年１回） ・九州大学朝鮮学研究会 懇話会 （月１回） ・朝鮮中近世史料講読会（月１回）
地理学講座	・九州大学地理学研究会（年１回）
考古学講座	・九州大学考古学談話会（年１回） ・九州大学史学会考古学部会（年１回） ・九州大学考古学研究室卒業論文・修士論文発表会（年１回） ・日本中国考古学会九州部会（年に数回） ・日本学術研究会 科学研究費 基盤研究（B）:「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究」の研究会（平成 23～26 年度、７回）
日本史学講座	・九州史学研究会大会（年１回） ・九州史学会日本史部会（年１回） ・九州史学研究会部会研究会（４部会で、年に計 20 回程度） ・楠本家資料研究会（毎週；平成27年度秋に終了）
東洋史学講座	・九州史学会東洋史部会
西洋史学講座	・九州史学会西洋史部会（年１回）
国語学国文学講座	・九州大学国語国文学会（年１回） ・筑紫日本語研究会（年６回） ・九州近世文学研究会（月１回）

	・日本語文法史研究会（年２回）
英語学・英文学講座	・九州大学英文学会（九英会）（年１回）
中国文学講座	・中国文芸座談会の開催（年７回） ・歴博共同研究会（各年５回；平成 23～25 年度の三年間に実施した。主に国立歴史民俗博物館を会場に研究会を開催した）。
独文学講座	・九州大学独文学会（年１回） ・トーマス・マン研究会（年４回；平成元年以降、平成 25 年３月 27 日で第 104 回目） ・九大独文科研研究会「ドイツの文学・思想におけるトポスとしての「黙示録文化」―「終末」の終末は可能か―」（年２回）
言語学講座	・九州大学言語学研究会（年３～５回） ・東京外国語大学 AA 研共同利用研究課題「通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーキング」（平成 27 年度より３年間；研究会はすべて AA 研にて実施） ・シベ語研究会（年１～２回。AA 研（アジア・アフリカ言語文化研究所）にて開催）
広人文学コース	・IMAP in Japanese Humanities Symposium on Pre-Modern Japanese Culture（臨時）： １. International Conference, Kyushu University, The Making of Religions and Religious Representations in Pre-Modern Japan: Imported, Native, and Modified Forms, 第１回 2014 年１月 26-28, 代表者：Cynthea J. Bogel ２. Fengshui in Asia and Beyond: Origins and Diasporas, 第２回 2014/01/27-29, 代表者：Ellen Van Goethem ３. The 3rd IMAP in Japanese Humanities Symposium of Pre-Modern Japanese Culture 第３回 2016 年１月 21-22, 代表者：Cynthea J. Bogel

○資料 32　定期的な研究会の開催頻度

研究会	講座	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
日本中国考古学会九州部会	考古学	３回	６回	４回	２回	４回	３回
研究会 :科学研究費基盤研究（B）代表 :辻田淳一郎	考古学		１回	２回	１回	３回	
日本語文法史研究会	国語学・国文学	２回	２回	２回	２回	２回	
九州近世文学研究会	国語学・国文学	11 回	11 回	11 回	11 回	11 回	11 回
歴博共同研究会	中国文学		５回	５回	５回		
トーマス･マン研究会	独文学	４回	４回	４回	４回	４回	４回
筑紫日本語研究会	国語学国文学	５回	６回	６回	７回	５回	１回
九州大学言語学研究会	言語学	５回	５回	５回	６回	５回	２回

○資料33　共同研究のための研究会実施状況（氏名と発表題目）

◎韓国国際交流財団助成・高麗大学校韓国史学科共同プロジェクト「朝鮮半島グローバル・ヒストリーの構築」

・2012年度第１回ワークショップ（2012年６月23日）
森平雅彦「朝鮮中近世の国際関係と交通路」
濱田耕策「新羅の国学運営と律令」

・2013年度第１回ワークショップ（2013年11月22日）
森平雅彦「モンゴル時代の東アジア海域と朝鮮半島」
濱田耕策「渤海史をどのように理解するか――冊封と時期区分」

◎日本中国考古学会九州部会

・第52回（2010年12月19日）
宮本一夫「四川省雅江県本家地遺跡の発掘調査」

・第53回（2010年４月９日）
宮本一夫「遼東半島上馬石貝塚踏査記」

・第57回（2011年12月２日）
宮本一夫「遼西・遼東の銅剣製作技術と近年の青銅器新出土例」
・第58回（2011月12月17日）
宮本一夫「モンゴル共和国ヘンティー県ダーラム板石墓の発掘調査」
・第59回（2012年６月29日）
宮本一夫「モンゴル高原板石墓発掘調査の意義と目的――ダーラム板石墓の調査成果を踏まえ」
・第60回（2012年７月28日）
辻田淳一郎「古墳時代中期同型鏡群の製作技術――鈕孔形態の観察から」
・第61回（2012年12月23日）
宮本一夫「四川省チベット自治区における日中共同発掘調査の成果」
・第64回（2014年１月25日）
宮本一夫「モンゴル国ボル・オボーの発掘調査」
・第70回（2016年2月20日）
宮本一夫（九州大学）「初期農耕に関する山東大学との共同研究－2015年度の研究活動報告－」
宮本一夫（九州大学）「モンゴル国ヒャウル・ヒャラーチ遺跡の発掘調査」

◎科研費基盤研究（B）「「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に」（研究代表者：辻田淳一郎）研究会
・第１回（2011年８月８日）
辻田淳一郎「山の神古墳の資料状況」
・第２回（2012年２月２日）
辻田淳一郎「山の神古墳の遺物の概要」他２名の報告
・第３回（2012年９月７日）
辻田淳一郎「山の神古墳の遺物の内容」他２名の報告
・第４回（2013年３月15日）
辻田淳一郎「山の神古墳の遺物の内容」他２名の報告
・第５回（2014年３月17・18日）
辻田淳一郎「山の神古墳出土の銅鏡」他10名の報告
・第６回（2014年６月28日）
辻田淳一郎「山の神古墳出土の刀剣類」他２名の報告
・第７回：成果報告会「山の神古墳と「雄略朝」期をめぐる諸問題」（2014年７月19・20日）
辻田淳一郎「古墳時代中・後期における同型鏡群の授受とその意義」他計11本の報告

◎台湾中央研究院劉序楓副研究員との共同研究
・「近世東亜海域史的多視角研究：以各国史料為中心的探討」工作坊（2011年11月４日）
中島楽章「十六世紀末的九州―東南亜貿易――以加藤清正的呂宋貿易為中心」
・*The Challenges of Global History in Maritime Studies: Trade, Network and Mediation in East Asia*（2012年11月３日）
中島楽章 “Smugglers and Firearms: Transmission of Western Style Firearms in the Dawn of the “Age of the Commerce””
・海洋史研究専題演講（2013年12月24日）
中島楽章「明代朝貢貿易体系的構造与変化」
・海洋史研究専題演講（2013年12月26日）
中島楽章「東亜海域交流史上的寧波与日本――以明代為中心的探討――」

◎東洋史学研究室講演会
・高福順（吉林大学教授）「前近代中国北疆における地理環境と民族」（2014年７月16日）

◎国立国語研究所共同研究プロジェクト
・NINJAL共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」研究発表会（2011年９月25日）
青木博史「クル型複合動詞の史的展開」、大阪大学
・NINJAL共同研究プロジェクト「日本語文法の歴史的研究」研究発表会（2012年３月４日）
青木博史「「統語的複合動詞」再考」、国立国語研究所
・NINJAL共同研究プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」研究発表会（2012年８月６日）
青木博史「日本語史における名詞節」、国立国語研究所
・NINJAL共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」共同研究発表会（2012年９月24日）
青木博史「複合動詞の歴史的変化」、
・NINJAL共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」シンポジウム（2012年12月15日）
青木博史「接続部における名詞節の脱範疇化について」

・国立国語研究所時空間変異研究系合同研究発表会（2013年３月21日）
　青木博史「言語変化と文法史研究」
・科研費基盤A「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究」・国立国語研究所消滅危機方言プロジェクト共同研究会（2013年３月18日）
　下地理則「グロスについて」

各教員は積極的に**国内外の学会や国際会議での役職**に就任し、その業務を通して人文学の諸学問分野の発展に貢献している（資料34）。ほとんどの教員が各分野で指導的役職に就き、学会運営や学会誌編集を行っており、学界からの高い期待に十分応えている。

○資料 34　学会や国際会議での役職就任状況

井手誠之輔（芸術学／教授）
　国際美術史学会北京大会　議長　※2006年
　日本学術会議　　連携会員
　美術史学会　　西支部事務局長　※2011～14年
　美術史学会　　常任委員

後小路雅弘（芸術学／教授）
　九州芸術学会　　代表幹事
　美術史学会　　常任委員
　民族藝術学会　　理事
　アジア近代美術研究会　　座長　※2004年度～

京谷啓徳（芸術学／准教授）
　美術史学会　　常任委員

東口豊（芸術学／准教授）
　美学会　　第65回全国大会実行委員長
　美学会　　西部会委員
　日本音楽学会　　第65回全国大会実行委員
　九州芸術学会　幹事　※2013年度まで

円谷裕二（哲学／教授）
　西日本哲学会　　会長
　日本カント協会　　常任委員、編集委員長
　日本哲学会　　評議員　　※2013年度まで
　日本現象学会　　評議員、編集委員

岡野潔（インド哲学史／教授）
　日本印度学仏教学会　　理事
　日本仏教学会　　理事
　印度学宗教学会　　評議員　※2013年度まで

片岡啓（インド哲学史／准教授）
　日本南アジア学会　　理事　※2014年９月まで
　日本印度学仏教学会　　評議員
　インド思想史学会　　評議員

南澤良彦（中国哲学史／准教授）
　九州中国学会　　理事
　日本中国学会　　出版委員　※2015～2016年度
　東方学会　　地区委員　※2015年５月～

宮本一夫（考古学／教授）
　日本学術会議　連携会員
　日本中国考古学会　　会長
　日本考古学協会　　理事
　九州考古学会　　運営委員
　九州・シルクロード協会　　理事

辻田淳一郎（考古学／教授）
　九州考古学会　　運営委員
　考古学研究会　　全国委員
　九州古文化研究会　　幹事

高木彰彦（地理学／教授）
　経済地理学会　　西南支部・支部長　※2012～2015年度
　日本地理学会　　会賞受賞候補者選考委員会・委員長　※2014年度
　日本地理学会　　代議員　※2012～2015年度
　人文地理学会　　協議員　※2008～2012年度、2014～2015年度
　第８回日韓中地理学会議　　実行委員長　※2013年

遠城明雄（地理学／教授）
　日本地理学会　　代議員　※2011年度まで
　人文地理学会　　協議員
　日本地理学会　　編集委員
　東北地理学会　　編集委員

今里悟之（地理学／准教授）
　日本地理学会　　代議員　※2014年度～現在
　日本地理学会　　英文誌編集委員　※2012年度～現在
　人文地理学会　　協議員　※2012～2013年度
　人文地理学会　　代議員　※2014年度～現在
　歴史地理学会　　評議員　※2013年度～現在
　日本村落研究学会　　理事　※2012～2013年度
　日本村落研究学会　年報編集委員　※2014年度～現在
　京都国際地理学会議　　組織委員会集会副委員長　※2012～2013年度

坂上康俊（日本史学／教授）
　日本歴史学会　　評議員
　九州史学研究会　　会長　※2014年10月まで
　東方学会　　学術委員
　東方学会　　査読委員
　古代学協会　　九州支部幹事
　木簡学会　　委員

佐伯弘次（日本史学／教授）
　九州史学研究会　会長　※2014年10月～
　九州史学会　　委員長　※2015年度
　日本古文書学会　　理事
　日本歴史学協会　　委員

山口輝臣（日本史学／准教授）
　日本歴史学会　　評議員

川本芳昭（東洋史学／教授）
　古代学協会　　編集委員
　東洋史研究会　　評議員
　東方学会　　学術委員
　中国社会文化学会　　評議員
　中国史学会　　評議員
　三国志学会　　理事
　九州大学東洋史研究会　　代表

舩田善之（東洋史学／講師）
　九州・シルクロード協会　　理事・事務局長

森平雅彦（朝鮮史学／准教授）
　東方学会　　学術委員・地区委員
　朝鮮史研究会　　編集委員
　韓国歴史研究会　　海外編集委員

山内昭人（西洋史学／教授）
　史学研究会　　評議員
　九州西洋史学会　　代表理事　※2010年度まで

岡崎敦（西洋史学／教授）
　九州西洋史学会　　代表理事
　九州西洋史学会　　理事（事務局長）　※2015年３月まで
　日仏歴史学会　　理事
　西洋中世学会　　理事　※2011年６月まで
　日本歴史学協会　　委員

清水和裕（イスラム文明史学／教授）
　日本中東学会　　評議員　※2007～2014年度

辛島正雄（国語学・国文学／教授）
　中古文学会　　委員
　西日本国語国文学会　　常任委員

高山倫明（国語学・国文学／教授）
　日本語学会　　評議員
　日本語学会　　大会企画運営委員会副委員長
　日本音声学会　　評議員
　西日本国語国文学会　常任委員
　訓点語学会　　委員
　日本語学会　　創立70周年記念シンポジウム企画・司会進行

青木博史（国語学・国文学／准教授）
　日本語学会　　評議員・編集委員・常任査読委員・電子情報委員
　日本言語学会　　評議員・大会運営委員・大会運営委員長
　日本語文法学会　　評議員・学会誌委員
　訓点語学会　　委員
　西日本国語国文学会　　常任委員・編集委員長

川平敏文（国語学・国文学／准教授）
　西日本国語国文学会　　常任委員・大会委員長
　日本近世文学会　　常任委員・編集委員・歴史的典籍DB連携委員

静永健（中国文学／教授）
　日本中国学会　　評議員
　日本中国学会　　理事
　日本中国学会第二回次世代シンポジウム（2013年）　代表幹事
　九州中国学会　　理事
　九州大学中国文学会　会長

西岡宣明（英語学・英文学／教授）
　日本英語学会　　事務局長・編集委員・評議員
　日本英文学会理事・九州支部長

鵜飼信光（英語学・英文学／教授）
　日本英文学会　　評議員　※2012年５月から
　日本英文学会九州支部　編集委員長　※2015年より
　日本ヴァージニア・ウルフ協会　運営委員長　※2013年、2014年

高野泰志（英語学・英文学／准教授）
　アメリカ学会　　評議員
　日本アメリカ文学会　大会運営委員
　日本英文学会九州支部　事務局長
　日本ヘミングウェイ協会　評議員、学術誌編集長
　日本F・スコット・フィッツジェラルド協会　評議員

小黒康正（独文学／教授）
　日本独文学会　　西日本支部福岡地区幹事　※1997年～

九州大学独文学会　　編集長　※2000～2014年
九州大学独文学会　　代表幹事　※1994年～
日本独文学会　　西日本支部選出理事　※2009～2012年
日本独文学会　　編集委員　　※2015年～
西日本日独協会　　副会長　※2010～2012年

武田利勝（独文学／准教授）
日本シェリング協会　理事　※2012年～
九州大学独文学会　　幹事　※2014年～
九州大学独文学会　　編集長　※2015年～
ゲーテ自然科学の集い　編集長　※2015年～
日本独文学会　　西日本支部編集委員　※2015年～

髙木信宏（仏文学／准教授）
日本フランス語フランス文学会　　編集委員　※2011年３月まで

久保智之（言語学／教授）
日本言語学会　　編集委員　※2012～2014年度
日本言語学会　　監査委員　※2015～2017年度
九州・シルクロード協会　　理事

上山あゆみ（言語学／教授）
日本言語学会　　編集委員　※2012～2014年度
日本言語学会　　常任委員　※2015～2017年度
日本語文法学会　　学会誌委員　※2013～2015年度
日本語文法学会　　評議員　※2015～2020年度

下地理則（言語学／准教授）
日本言語学会　　広報委員　※2014年３月まで
日本言語学会　　夏期講座委員

シンシア・ボーゲル（広人文学／教授）
University of Washington　Affiliate Professor
Oxford University Press　Advisory Editor （編集役員）
Metropolitan Center for Far Eastern Art Studies　Art Advisory Board Member（役員）
美術史学会　　編集委員
九州芸術学会『デアルテ』　　編集委員

エレン・ヴァン＝フーテム（広人文学／准教授）
Academic Journal of Feng Shui　Advisory Board Member
Silva Iaponicarum　Editorial Board Member

以上のように、Ⅰに示したポリシーに沿って、研究目的に沿った研究活動を行っている。

（水準）
期待される水準を上回る

（判断理由）
本研究院では、研究３ポリシーに基づいた研究活動を行っている。
（１）**アウトカム・ポリシー**：　論文数・著書数・発表数から判断して、高い生産力が維持されていていると言える。21 世紀 COE プログラムの採択を契機に、日本とアジアの思想・芸術・歴史・文学等幅広い分野で国際的学術交流が活発化したが、相互交流のパイプは一層拡がりつつある。国内の他大学との共同研究も盛んであり、教員の諸学会における活発な活動は、学界からの高い期待に応えている。また研究成果を社会に還元するため、社会との連携・協力を推進し、社会からの期待に応えている。
（２）**インフラストラクチャー・ポリシー**：　競争的資金等の受入状況については、競争的資金の中心となる科研費補助金において、本研究院は高い採択率の水準を保っており、

科研費以外の競争的資金獲得を積極的に行っている。

（３）**マネージメント・ポリシー**：　獲得した競争的資金等によって、特に文献学における研究力の高さに直結する図書資料の充実に力を入れており、他大学と比べて圧倒的に多い量と高い質の蔵書を形成し、研究環境を整備している。

以上により、リサーチポリシー（研究３ポリシー）に基づいた取組や活動の状況が優れていることから、学界並びに国民の、学術的・社会的期待の水準を上回ると判断される。

分析項目Ⅱ　研究成果の状況

観点２－１　研究成果の状況

（観点に係る状況）

２－１－（１）　学部・研究科等の組織単位で判断した研究成果の質の状況

本研究院教員の学術賞受賞を資料 35 に示した。これらは本研究院で高い水準の研究が行われていることの証左である。例えば６番はその学術分野では国内最高の賞である。

○資料 35　本研究院教員の学術賞受賞（抜粋）

番号	受賞年	受賞者	賞の名称	受賞内容	授与組織
1	H22	岩田圭一	西日本哲学会第２回若手奨励賞	アリストテレス研究への貢献が評価された。	西日本哲学会
2	H22	下地理則	Stephen Wurm Prize for the best PhD Thesis	Australian National University に提出した博士論文が評価された。	Australian National University
3	H22	片岡啓	日本印度学仏教学会賞	印度学仏教学研究に掲載した論文の学界への高い貢献が評価された。	日本印度学仏教学会
4	H22	久保智之	平成 22 年度九州大学研究活動表彰	大型の科研費補助金も獲得し、外部から高い評価を受ける業績を生み出しつつある研究活動が評価された。	九州大学
5	H23	今里悟之	第 10 回人文地理学会学会賞（論文部門）	日本の農村における民俗的な空間分類体系に関する研究論文が評価された。	人文地理学会
6	H27	片岡啓	鈴木学術財団特別賞	ウィーンから英文で出版した著作が日本の印度学・仏教学研究に著しく貢献したと評価された。	日本印度学仏教学会
7	H27	武田利勝	第 12 回日本独文学会学会賞・日本語論文部門	日本独文学会編「ドイツ文学」146 号掲載の論文「境界の自律性――カール・フィリップ・モーリッツにおける装飾の有機的自己形成について」の学術的意義が評価された。	日本独文学会

組織単位での研究成果も多く（資料 36)、その中に所属教員による「人文学叢書」の５冊を含んでいる（９～13 番)。「人文学叢書」によるそれらの出版は、本研究院の教員が行った優れた研究を選定して行ったものであり、本研究院の研究を推進する特筆すべき組織的取組の一つである。また、本研究院が出版した教科書４冊を含んでいる（１～４番)。

○資料 36　組織単位での研究成果の質の高さを示す論文等

番号	研究者	タイトル	掲載誌・出版社	研究概要（研究内容、外部からの評価等）
1	森平雅彦・岩崎義則・高山倫明編著	東アジア世界の交流と変容（人文学入門１）	九州大学出版会(2011)	文学部の全教員が参加する人文学共通科目「人文学Ⅰ～Ⅳ」のための教科書の第１冊。九州大学の学内プロジェクトである「教育の質向上支援プログラム」(EEP)に採択され、刊行された。
2	片岡　啓・清水和裕・飯嶋秀治編著	生と死の探究（人文学入門２）	九州大学出版会(2013)	文学部の全教員が参加する人文学共通科目「人文学Ⅰ～Ⅳ」のための教科書の第２冊。EEP に採択され、刊行された。
3	光藤宏行編著	コミュニケーションと共同体（人文学入門３）	九州大学出版会(2012)	文学部の全教員が参加する人文学共通科目「人文学Ⅰ～Ⅳ」のための教科書の第３冊。EEP に採択され、刊行された。

4	岡崎　敦・岡野潔編著	テクストの誘惑ーフィロロジーの射程（人文学入門４）	九州大学出版会(2012)	文学部の全教員が参加する人文学共通科目「人文学Ⅰ～Ⅳ」のための教科書の第４冊。EEP に採択され、刊行された。
5	宮本一夫・高　大倫編	『東チベットの先史社会――四川省チベット自治州における日中共同発掘調査の記録』	中国書店（2013）	考古学研究室の教員・大学院生を中心とする九州大学の考古学者による日中国際共同研究の成果。発掘調査にもとづき中国西南地域の青銅器文化を実証的に解明。『考古学研究』61-４（2015）所載の書評で高く評価され、中国でも中国語版が同時刊行された(『西南地区北方譜系青銅器及石棺葬文化研究』科学出版社)。
6	辻田淳一郎編	『山の神古墳の研究―「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に―』	九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室（2015）	考古学講座によって遂行された科研費の研究成果報告書。５世紀後半から６世紀代を中心として、北部九州の遠賀川上流域の地域集団が対半島交渉や中央政権の政治活動に深く関与していたあり方と、その地域的基盤について、考古学的な実証研究を元に論じたもの。
7	九州大学と大阪市立大学	『空間・社会・地理思想』No.14･15,18	大阪市立大学	大阪市立大学地理学講座と九州大学の地理学講座等の教員によって組織された、地理思想・地理学方法論に関する科研費の研究成果として刊行された学術雑誌。地理学講座の教員は全員が参加している。
8	清水和裕	『イスラーム史のなかの奴隷』山川出版社	高校生、大学生、一般社会人向けに、イスラーム社会の奴隷制に関する最先端の研究成果を紹介した。	リブレットタイプの一般にも入手しやすい形態の書物である。『イスラーム世界研究』本年度刊行号に、鈴木英明氏（長崎大学）による書評の掲載が予定されている。高校において在校生向けの推薦書として挙げられた例もあるようである。（http://www.meisei.ed.jp/gakuen/library/eb_h.html）
9	菊地恵善	始めから考えるーハイデッガーとニーチェ	九州大学出版会(2014)	本書は、ハイデッガーが終生考え続けた「存在」と、彼が批判し克服しようとしたニーチェ哲学を捉え直そうとした研究である。査読を行い、研究院を代表する１成果として出版に価すると研究院教授会によって判断され、部局経費で「九州大学人文学叢書６」として出版された。
10	小黒康正	水の女ートポスへの船路	九州大学出版会(2012)	本研究は､ヨーロッパ文学に頻出する｢水の女」を、人間の魂を求める物質存在と「陸の男」を水底へと誘う女性存在と新しい文学言語を導く言語存在の複合体として考究した研究である。査読を行い、研究院を代表する１成果として出版に価すると研究院教授会によって判断され、部局経費で「九州大学人文学叢書２」として平成 24 年３月に出版された。
11	鵜飼信光	背表紙キャサリ・アーンショーーイギリス小説における自己と外部	九州大学出版会(2013)	精神分析理論の出現以前のイギリス小説の作家たちによる無意識の独自の表現の解明と、自己と外部の境界の曖昧さの表現の解明を行った研究である。査読を行い、研究院を代表する１成果として出版に価すると研究院教授会によって判断され、部局経費で「九州大学人文学叢書４」として出版された。

12	辛島正雄	御津の浜松一言抄－『浜松中納言物語』を最終巻から読み解く	九州大学出版会(2015)	本書は、平安後期物語の代表作の一つである『浜松中納言物語』についての、きわめて斬新な注釈的研究である。査読を行い、研究院を代表する１成果として出版に価すると研究院教授会によって判断され、部局経費で「九州大学人文学叢書８」として出版された。
13	山内昭人	戦争と平和、そして革命の時代のインタナショナル	九州大学出版会(2016)	本書は、40 数年にわたる研究をまとめたもので、国際社会主義運動史の一大再編過程の全体像を学界に示したものである。査読により、研究院を代表する１成果として出版に価すると研究院教授会によって判断され、部局経費で「九州大学人文学叢書」として出版された。

（説明）　表の９～13 番の本は、人文学叢書として教授会の議を経て出版された、人文科学研究院所属の教員による研究書である。人文学叢書は人文科学研究院所属の教員によるオリジナルな研究、及び大学院人文科学府の学位論文の中から、毎年それぞれ１冊ずつ刊行するもので、平成 24 年３月に刊行を開始し平成 27 年３月までに８冊が刊行されている。
　また表中の５～７番の本は、講座単位での研究成果であり、考古学講座や地理学講座における科研費等の資金を利用した研究成果として刊行されたものである。

本学の学内プロジェクトである「教育の質向上支援プログラム」（EEP）（資料 37 参照）に採択された取組課題が２件ある（資料 38）。本研究院は、平成 23～25 年にかけて、研究の成果を４冊の入門的な教科書（上記の資料 36、表中の１～４番）として刊行した。これは、人文科学研究院及び文学部が総力を結集して研究成果を刊行した特筆すべき取組の一つである。

○資料 37　教育の質向上支援プログラム Ｅnhanced Ｅducation Ｐrogram（EEP）

平成 21 年度から実施している教育の質向上支援プログラム（EEP）は、中期目標・中期計画に掲げる教育に関する目標・計画の達成に資する部局等の主体的な取組を支援することにより、教員及び組織の教育力の向上を図り、本学の教育改革を推進することを目的とするものである。

○資料 38　教育の質向上支援プログラム（EEP）採択状況

採択年度	取組課題
平成 23 年度	人文学共通科目教科書の開発と作成
平成 25 年度	文系ディシプリン科目教科書・副教材の開発

２－１－（２）　学部・研究科等の研究成果の学術面及び社会、経済、文化面での特徴

「研究業績説明書」で示したように、哲学（インド哲学・美術史・西洋哲学等）、歴史学（日本史学・考古学・東洋史学・朝鮮史学等）、文学・語学（中国文学・日本語学・言語学等）の分野で特に優れた研究が多い。それは、アジア・日本研究において顕著である。
　これらは、本研究院が掲げる四つの研究目的に沿っており、原典を精確に読み、理論と実証を融合した優れた研究、国際的な視点を持つ国際的な共同研究、日本及びアジア研究に大きな特色がある。
　また、外部からの評価が高い一般向けの著書も多く刊行している（資料 39）。「人文学入門」の教科書シリーズは、朝日カルチャーセンターの提携講座でも教科書として使用しており、研究成果の社会、経済、文化面での特徴を示すものと言える。

○資料 39　研究成果の社会、経済、文化面での特徴を示す研究成果

研究者	タイトル	研究概要	外部からの評価
森平雅彦・岩崎	東アジア世界の交流と	九州大学出版会（2011）	文学部の全教員が参加する人文学共通科目「人文学Ⅰ～Ⅳ」のための教科書の第１冊。九州大学の「教

義則・高山倫明編著	変容（人文学入門１）		育の質向上支援プログラム」(EEP) に採択され、刊行された。朝日カルチャーセンターの提携講座でも教科書として使用される。
片岡啓・清水和裕・飯嶋秀治編著	生と死の探究（人文学入門２）	九州大学出版会（2013）	文学部の全教員が参加する人文学共通科目「人文学Ⅰ～Ⅳ」のための教科書の第２冊。九州大学の EEP に採択され、刊行された。朝日カルチャーセンターの提携講座でも教科書として使用される。
光藤宏行編著	コミュニケーションと共同体（人文学入門３）	九州大学出版会（2012）	文学部の全教員が参加する人文学共通科目「人文学Ⅰ～Ⅳ」のための教科書の第３冊。九州大学の EEP に採択され、刊行された。朝日カルチャーセンターの提携講座でも教科書として使用される。
岡崎敦・岡野潔編著	テクストの誘惑ーフィロロジーの射程（人文学入門４）	九州大学出版会（2012）	文学部の全教員が参加する人文学共通科目「人文学Ⅰ～Ⅳ」のための教科書の第４冊。九州大学の EEP に採択され、刊行された。朝日カルチャーセンターの提携講座でも教科書として使用される。
坂上康俊代表編集	『新編　新しい社会　歴史』東京書籍	人類の誕生から現代社会に至るまでの日本を中心とした世界の歴史について、最新の研究成果を分かりやすく盛り込んで作成した定評ある教科書。	研究成果を教科書として社会に還元したもので、中学校の歴史の教科書として過半数の支持を得て用いられている。
坂上康俊	『平城京の時代』岩波新書	奈良時代史研究の最新の成果を盛り込んで通史的に叙述したもの。	岩波新書による刊行で一般にも入手しやすい形態の書物であり、実際に３万部以上の刊行を見ている。
清水和裕	『イスラーム史のなかの奴隷』山川出版社	高校生、大学生、一般社会人向けに、イスラーム社会の奴隷制に関する最先端の研究成果を紹介した。	リブレットタイプの一般にも入手しやすい形態の書物である。『イスラーム世界研究』本年度刊行号に、　鈴木英明氏（長崎大学）による書評の掲載が予定されている。高校において在校生向けの推薦書として挙げられた例もあるようである。（http://www.meisei.ed.jp/gakuen/library/eb_h.html）
山口輝臣	『中学社会歴史　ともに生きる』教育出版	最新の研究成果を分かりやすく盛り込んで作成した定評ある教科書。	研究成果を教科書として社会に還元したもので、中学校の歴史の教科書としての占有率は第２位。
山口輝臣	『島地黙雷』山川出版社	明治日本を代表する仏教者について、高校生、大学生、一般社会人向けに、最新の成果を盛り込んだ評伝。	リブレットタイプの一般にも入手しやすい形態の書物である。読むに値する仏教書として仏教者からも推薦されている。http://j-soken.jp/read/4790。
清水和裕（執筆）	『新詳　世界史 B』帝国書院	前近代イスラーム史の執筆を担当	高校世界史 B 検定教科書。平成 27 年度占有率９．５％。
川平敏文	「徒然草落ち穂ひろい」	西日本新聞朝刊・文化欄に、平成 27 年年９月１日～９月９日にかけて、６回連載。	一般人の読者から手紙が２通寄せられたほか、ブログでも紹介された（http://blogs.yahoo.co.jp/adust106/19568642.html）。
宮本一夫	『遼東半島上馬石貝塚の研究』	九州大学出版会（2016）	1941 年に発掘調査された中国遼寧省大長山島上馬石貝塚の発掘報告並びに研究論文を掲載したもの。調査後約 70 年を経過して発掘の内容が初めて明らかとなったものである。さらに本書では新石器時代から青銅器時代における東北アジアの編年網が構築されているとともに、土器製作技術の伝播過程や農耕の伝播過程を明らかにしたものである。さらに、日本列島の弥生文化の成立過程とその実年代を

			考古学的に説明したものである。

（水準）
期待される水準を上回る

（判断理由）
本研究院では、研究３ポリシーに基づく研究成果が十分に上がっている。
組織単位で見る**研究成果の質の状況**については、毎年の受賞の状況から、成果の質が、第１期中期目標期間終了時点の水準に劣らぬ、高い水準を維持していると判断される。教員の総力をあげて、人文学叢書の刊行に取り組んでいることや「人文学入門」を刊行したことは、この高い研究の質を維持するための新たな努力である。また、講座単位での組織的な努力としては、多くの講座で、継続的に科研費を取得し、その成果としての刊行物を出版する等の成果を上げている。
教科書「人文学入門」シリーズ４冊を出版し、それを文学部の授業や朝日カルチャーセンターとの提携講座において用いるなどの活動は、学術的にも、また社会・経済・文化的に見ても、高い成果を上げている。
本研究院では、総ての講座が学会組織を持ち、それぞれ西日本地区における学術研究において重要な役割を果たしている。例えば、九州を代表する歴史学の学会である九州史学会は、その委員長を本研究院の歴史学部門長が務めており、歴史学部門がその運営に組織的に関与している学会である。こうした**部門や講座組織をあげての多様な学問領域での活発な学会活動が本研究院の特徴**である。講座単位での学会発表が学部・学府でも活発に行われ、質の高い研究成果が得られている。

以上により、研究ポリシー実現の観点から見て、研究成果の状況が優れており、想定する学界並びに国民の、学術的・社会的期待に応えていると考えられることから、期待される水準を上回ると判断される。

Ⅲ　「質の向上度」の分析

（１）分析項目Ⅰ　研究活動の状況

本研究院は組織的に研究成果の公表に取り組み、「九州大学人文学叢書」や「人文学入門」を出版した。後者については授業や提携講座の教科書として用い、市民や高校教員等から高い評価を得るなど、本研究院は社会貢献という点でも組織的に取り組んだ。これは第１期ではなかった取組である。さらに、各種の研究活動（著書・論文の公表、学会報告、科研等の取得、学会役職への就任等々）が、第１期と比較して活発となっている。

（２）分析項目Ⅱ　研究成果の状況

年平均の著書数が顕著に増加し、講座単位での研究成果の公表も盛んになり、国際的な舞台での発表数も第１期に比して増加した。さらに、公表された研究成果に対する学会や社会等からの評価も高まっている。したがって、第１期に比べると重要な質の変化があったと判断される。